

会長に就任して

一般社団法人日本社会福祉学会 会長 和気 純子(東京都立大学)

2024年5月26日に行われました2024年度社員総会およびその後の臨時理事会において、第9期(通算30期)の会長を仰せつかりました東京都立大学の和気純子です。もとより力量不足ではございますが、今後2年間、会員の皆様方のニーズをふまえ、時代の変化に応えながら、社会福祉学の礎を確かなものとし、さらに新たな発展を期すべく、理事および各種委員会の委員の皆様とともに最善を尽くす所存ですので、よろしくお願い申し上げます。

さて、本年は学会創立70周年の節目の年となります。私自身が初めて理事となり、学会の運営に携わるようになったのは12年ほど前に遡ります。当時は四ツ谷に事務所を借り、数名の事務局員を直接雇用しておりました。しかし、非正規雇用であった事務局員の方々の雇用のあり方が問われていたことや、事務所の耐震性も問題となっていたこともあり、安定的な学会運営を図る観点から、事務局を全面的に外部委託することになりました。公募審査を経て、現在の(株)国際文献社に事務業務を移管することになり、その対応に追われる日々でした。その後、これまで4期にわたって財務担当理事や副会長(国際学術交流委員長)を経験する機会をいただきました。現在、学会が安定的に運営されていることを鑑みると、この間の関係者および会員の皆様のご尽力にあらためて感謝する次第です。

一方で、12年前より顕在化しつつあった課題のいくつかは、解決されないまま引き継がれています。最も大きな課題となっているのが、人口減少少子高齢化による会員数の減少です。社会福祉学領域では、大学等の研究教育機関においても、学生数の減少による閉学や別の分野への転換を図るところが増えています。こうした事態をふまえ、学会では、多様化する社会のもとで、その構成員である会員の皆様の多様なニーズや研究関心を的確にとらえ、その研究活動を支援するために、いくつかの新たな取り組みに着手しています。例えば、2022年より長期会員制度を導入しています。この制度は、65歳以上で定年等により常勤職を退き、新たに常勤職につかれない方で、25年以上学会に所属された方を対象に、会費の減免を行い、退職後の学会における研究活動の継続を促すものです。また、大学院生や初期キャリアの方々の研究支援を拡大するため、デジタルツールを用いて相互の交流を図るなど、多様な試みを実施しています。さらに国際学術交流促進委員会では、これまでの日中韓の連携に加え、欧米を含めた他の国々とも積極的な交流を図っていく予定にしています。

また、前期より「学会あり方検討会」を設置し、若手の役員の皆様の視点から今後の学会の在り方について議論してまいりましたが、今期からは、さらに検討会を常設の「学会基本構想委員会」に発展させ、10年後を見据え、より具体的な構想を検討していただきます。さらに、人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会、通称(GEAHSS)については、本年10月より本学会が副幹事学会、来年10月からは幹事学会となることが予定されています。男女共同参画にむけて、本学会が十分にその役割を果たせるよう、重責を果たしてまいります。


一方で、コロナ禍で急激に進んだデジタル化も、研究や私たちの生活のあり様に大きな変化をもたらしています。学会におきましても、対面でなければ得られない人とのつながりを大切にしながら、

一方でデジタル化の活用も図り、大会等ではオンデマンド方式を適宜取り入れるなどして研究活動へのアクセスを保障し、研究活動の更なる活性化に努めていく所存です。

ところで、先日開催された春大会のテーマは、「戦争と社会福祉～歴史研究に学ぶ」でした。コロナ禍が一定の収束をみたものの、国内外では災害や戦争が多発し、その惨状を画面越しに見ない日はありません。こうした事態に対し、学問としての社会福祉学がなすべきことは何なのか、あらためて考える必要性を痛感しています。


約10年前、岩田正美先生が本学会の会長であった時、「戦後70年の8月15日によせて」という会長声明を発議し、社会福祉系学会連合に所属する複数の学会長もこれに賛同し、共同声明を発出いたしました。もっとも、その時は、ロシアによるウクライナへの侵攻を含め、戦争の危機がこれほど身近に感じられることになるとは、想像にも及びませんでした。近年、ウクライナのみならず、中東、中国、北朝鮮など近隣の諸国においても、戦争への危惧がより現実味を帯びています。また、日本においても、先の戦争の反省から生まれたさまざまな取組がほごにされる兆しがみられます。

このような不透明な時代を迎えた今、あらためて一人ひとりの生活を支え、「誰一人取り残さない」社会の在り方を模索する社会福祉学の意義が問われています。その意義を再確認し、研究を通してその実現に共々に取り組めるよう、皆様方とともに協働してまいりたいと存じます。会員の皆様からの積極的なインプットを期待しています。



日本社会福祉学会第72回秋季大会開催のご案内

実行委員長 保正 友子(日本福祉大学)



この度、第72回秋季大会を2024年10月26日(土)・27日(日)に、東海市芸術劇場・日本福祉大学東海キャンパスで開催することとなりました。大会テーマ「現代における社会福祉の本質を探る」のもと、様々な企画を展開する予定です。対面実施となりますが、一部のプログラムはオンデマンドで配信します。それでは内容を御紹介します。

1. 学会プログラム

1日目午前中のスタートアップ・シンポジウム「実践と研究の循環を考える」(日本福祉大学東海キャンパス)では、3人のシンポジストの発題を基に考えていきます。研究支援委員会が主催するこのプログラムには、初期キャリア研究者をはじめ多くの方に御参加いただきたい企画です。

午後からは、近くの東海市芸術劇場で開会式を行います。学会長・東海市長の御挨拶を行い、学会賞授賞式も開催します。

そして、大会校企画シンポジウムは「生活不安定層への新たなセーフティネット」をテーマに、様々な側面から生活不安定層への新たなセーフティネットについて検討し、現代における社会福祉の本質に迫ることがねらいです。宮本太郎先生(中央大学教授)の基調講演後に、3人のシンポジストの方から発題していただきます。

夜は、東海市芸術劇場の多目的ホームにて情報交換会を行います。愛知県の食べ物や音楽をお楽しみください。

2日目は、日本福祉大学東海キャンパスが会場となります。口頭発表、ポスターセッション、特定課題セッションの合間に、「国際学術交流・研究のあり方を問う(仮)」をテーマにした学術シンポジウムを開催します。学会における国際学術交流のあるべき姿を、グローバルな視点で検討し、国際交流をベースとした研究(国際比較研究等)のあり方について学術的な視点から検証することがねらいです。

そして、2日目最後の企画は学会企画シンポジウムになります。「社会福祉における『つながること』を再考する—『つながり』と『匿名性』—」をテーマに、「匿名性」と「つながり」を切り口にして社会福祉の実践や研究について、4人のシンポジストの方からの発題を基に考えていければと思います。

2. 皆様をお願いしたいこと

次に、いくつか皆様をお願いしたいことがあります。

まず、学会の参加申し込みについてです。現在、参加申し込み期間が始まっており、9月19日までは早割り期間となります。また、正会員の内、大学院生・大学生・専門学校生の学生が、9月19日までに所定の手続きをして承認された場合には、秋季大会の参加費が免除され無料になりますので、ぜひ早めにお申し込みください。

次に宿泊場所についてです。最寄りの太田川駅は名鉄名古屋駅から17分、中部国際空港からも20分のため利便性が高く、アクセスしやすい場所になります。そのため、東海市のホテルとともに金山駅や名古屋駅付近のホテルも利用されると便利です。

次に昼食についてですが、お弁当の事前注文は行いません。近くに飲食店やコンビニエンスストアがありますので、ご利用ください。また、27日は大学内の生協食堂も開いています。

そして、クローク、書店等の販売、情報保障、保育についても手配していきますので、詳しくはホームページを御覧ください。

▼第72回秋季大会「参加申込要領」

<https://www.jssw.jp/conf/72/entry.html>

本大会が皆様にとって最新の研究知見を把握し、ネットワークが形成できる機会になりますように、スタッフ一同、心を込めて準備を進めて参りますので、多くの方のご参加をお待ちしております。

2024年度 一般社団法人日本社会福祉学会定時社員総会 報告

第8期総務担当理事 木下 武徳(立教大学)

一般社団法人日本社会福祉学会2024年度定時社員総会は、2024年5月26日(日)10時から、明治学院大学白金キャンパス本館2階1201教室にて開催された。

議案はすべて承認され、11時50分に解散した。

I. 会長挨拶

一般社団法人日本社会福祉学会空閑浩人会長より開会挨拶があった。

II. 定足数確認

総務担当理事より、社員153名で定足数78名に対して、現在の社員出席者が138名(委任社員94名を含む)となったことから、定款第31条ならびに定款第32条に基づき、2024年度定時社員総会を開催し、空閑会長が議長となり議事を進行するとの開会宣言があった。

III. 議事録署名人の選出について

定款第37条第2項に基づき、議事録署名人として大島巖監事、岡部卓監事を選出した。

IV. 議事

第1号議案：(一社)日本社会福祉学会2023年度事業報告・決算・監査報告について

議長から、2024年4月30日に大島巖監事、岡部卓監事により監査が行われた「2023年度事業報告及び決算・監査報告」について審議していただきたいとの趣旨説明があった。

まず2023年度の事業報告について、総務担当理事より配付資料に基づき報告があった。学術研究集会の開催、学会機関誌の刊行、研究奨励・研究業績の表彰、関連学術団体との連携、国際的な研究活動の推進の報告があった。また、学会の組織運営に関して、会員の動向、総会・理事会及び運営委員会の開催、監査、各種委員会の活動、各地域ブロックの活動状況の報告があった。

引き続き、室田信一財務担当理事より、2023年度の学会本部事業、全国大会運営事業、出版事業、及び各地域ブロックの財務状況を含めた決算報告について、配付資料に基づき報告があった。

その後、大島監事より、学会業務及び経理に関わる監査報告があり、適正に業務の遂行及び予算の執行がなされているとの報告があった。

審議の結果、一般社団法人日本社会福祉学会2023年度事業報告及び決算・監査報告が賛成多数により承認された。

第2号議案：(一社)日本社会福祉学会第9期役員承認について

議長からの趣旨説明に続いて、定款第16条により、本日の2024年度定時社員総会終結をもって任期が終了する第7期代議員の後任選出のため、第8期代議員選挙の実施及びその結果について、選挙管理委員会担当である木下より報告した。

さらに、定款第21条により、本日の2024年度定時社員総会終結をもって任期満了となる第8期

役員の後任選出のため、第8期代議員による第9期役員候補者選挙の実施、及びその結果について報告を行った。

総務担当理事より、第9期選挙理事候補者による推薦理事候補者選出会議を開催し、推薦理事候補者6名が推薦された旨の報告があり、第9期役員候補者22名の氏名が紹介された。

審議の結果、第9期役員承認について、賛成多数により承認された。

第3号議案：(一社)日本社会福祉学会名誉会員規程の改正について

議長からの趣旨説明に続いて、木下総務担当理事より、「一般社団法人日本社会福祉学会名誉会員規程」第4条3項について、名誉会員からの要望により地域ブロック主催の研究大会等の参加費にも適用されるよう、「全国大会への参加費が免除される。」から「全国大会ならびに各地域ブロック主催の研究大会等への参加費が免除される。」と改正する旨が配付資料に基づいて説明された。

審議の結果、「一般社団法人日本社会福祉学会名誉会員規程」の改正が満場一致で承認された。

第4号議案：(一社)日本社会福祉学会2024年度事業計画及び当初予算について

議長からの趣旨説明に続いて、総務担当理事より2024年度事業計画の説明があり、その内容に基づいて室田財務担当理事より当初予算の説明があった。概ね2023年度を踏襲した事業計画及び当初予算を作成していることを確認した。

審議の結果、2024年度事業計画及び当初予算が賛成多数により承認された。

第5号議案：名誉会員の推挙について

議長より、2024年3月3日開催の理事会にて、定款第6条ならびに一般社団法人日本社会福祉学会名誉会員規程に基づき、本会の発展に多大なる貢献をされた白澤政和会員、黒木保博会員および牧里毎治会員を名誉会員として推挙することが承認されたとの趣旨説明があった。

審議の結果、名誉会員への就任が満場一致で承認された。

第6号議案：その他

特になし。

V. 報告

1. 第8期代議員選挙について

第2号議案の際に報告済みである。

2. 第9期役員候補者選挙について

第2号議案の際に報告済みである。

3. 学会のあり方検討委員会からの報告

議長からの趣旨説明に続いて、総務担当理事より配付資料に基づいて、報告があった。

本会が抱える課題の解決に向けては、事業を横断的に、長期展望を持って検討する必要があることから、2021年7月に設置した学会のあり方検討会を常設委員会「学会基本構想委員会」とするとの説明があった。

4. 学会基本構想委員会の発足について

報告事項3.の際に報告済みである。

5. その他

・新役員挨拶

議長より第9期役員の紹介があり、第9期役員を代表して和気純子会員より挨拶があった。

議長より、新たに名誉会員となられた白澤政和名誉会員、黒木保博名誉会員および牧里每治名誉会員への祝辞および表彰楯の贈呈があった。次いで、白澤政和名誉会員、黒木保博名誉会員および牧里每治名誉会員より順番にご挨拶を頂戴した。出席者より新名誉会員3名へ盛大な拍手が贈られた。

議長は、議事終了の旨を告げ、11時50分 2024年度定時社員総会を解散した。

以上

一般社団法人日本社会福祉学会第72回春季大会報告

全国大会運営委員春季大会担当
山田 壮志郎(日本福祉大学)

大会テーマ：戦争と社会福祉－歴史研究から学ぶ

開催日時：2024年5月26日(日)13:00～17:00

会場：明治学院大学白金キャンパス本館1101教室

2024年5月26日、第72回春季大会が開催されました。

冒頭に、この日の定時社員総会と理事会で第9期の会長に選出された和気純子新会長より開会あいさつがありました。続いて日本社会福祉学会2023年度学術賞受賞者講演として、林健太郎氏(慶応義塾大学・受賞作『所得保障成立史論－イギリスにおける「生活保障システム」の形成と法の役割』)よりご講演いただきました。林会員からは、本研究の着想や成り立ちにも触れていただきながら、労働と所得保障との関係性や労働者の生活保障システムが中世から現代にかけてどのように引き継がれてきたのかについて説得力あるお話をいただきました。奇しくもその後のシンポジウムのテーマと重なり合う内容で、大会全体に深みを持たせてくれたように思います。

その後、「戦争と社会福祉－歴史研究から学ぶ」をテーマとするシンポジウムを行いました。シンポジストとして藤井渉氏(日本福祉大学)、武田尚子氏(早稲田大学)、土屋敦氏(関西大学)の3名にご登壇いただき、コメンテーターを杉山博昭氏(ノートルダム清心女子大学)、コーディネーターを山田が務めました。

藤井氏からは、国民を序列化する徴兵検査基準などを切り口に戦時下において障害者がどのように扱われたかを明らかにするとともに、こうした差別構造が今日にも繋がっていることが指摘されました。武田氏からは、イギリス軍需省福祉部長を務めたB.S.ロントリーによる工場福祉政策の展開過程が丹念に説明され、戦時下において女性労働者の労働環境が整えられた皮肉な歴史的事実が明らかにされました。土屋氏からは、戦争孤児へのインタビュー調査をもとにそのライフストーリーが紹介され、戦争が児童にもたらした悲惨な状況と、それが70年もの間語られなかったことの重みが指摘されました。

3名の報告を受け、コメンテーターの杉山氏からは、戦時下の福祉と戦後の福祉との連続性や共通性について受け止める必要があること、福祉が戦争にどう使われてきたのかを理解する必要があることが指摘されました。これらの論点とフロアから寄せられた質問をもとに、限られた時間ではありましたがシンポジストによるディスカッションが交わされました。議論の時間を十分確保できなかったことが心残りでしたが、ウクライナやガザの戦況を省みるまでもなく、日本においてさえ、「戦争と社会福祉」を過去の問題としてでなく現在の問題として捉えることの重要性を学ぶことのできた有意義なシンポジウムでした。

最後に、本郷秀和新副会長より閉会のあいさつをいただき、無事に大会を終了することができました。ご参加いただいた皆様、大会開催にあたりご協力をいただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



地域ブロック情報



日本社会福祉学会には7つの地域ブロックがあり、それぞれに特徴的な活動が展開されています。今号では、北海道地域ブロックの活動についてご紹介いたします。

北海道地域ブロックから

北海道地域ブロック担当理事
大友 芳恵(藤女子大学)

気象変動や自然災害が絶えない現代において、心穏やかでない社会事象に憂うことが多く、社会福祉の役割を再確認することが多くなっておりますが、北海道のこの時期の5月・6月の、風が心地良い時期には「ライラックまつり」「よさこいソーラン祭り」が開催されます。また、7月の後半には「札幌ビアガーデン」も始まり、まさに季節を味わう日々となります。

今回は、「ライラック」について少しご紹介しようと思います。

北海道の雪解け以降には、大地が芽吹きはじめ生命の躍動を感じる北海道を体感することができます。我が家の庭先にもライラックがありますが、その可憐な淡い花びらを眺めると、不思議と心を落ち着かせることができる花です。

このライラックは、今日では札幌市のシンボルにもなっていますが、実は北星学園の創設者サラ・C・スミスが1890年に故郷であるアメリカから携えてきた苗木がその始まりとされています。1959年には「ライラックの花が咲き揃う季節に文化の香り高い行事を行う」という文化人の呼びかけにより始まったのがライラックまつりです。また、1960年には、市民投票によって、ライラックは「札幌の木」に選ばれました。

異国の地から北海道に根付いて130年のライラックのように、私たちも大地に根付き、人びとの生活が花開くように社会福祉の研究や実践を展開していきたいものです。

さて、2023年度の北海道ブロックの活動を振り返りますと、『北海道社会福祉研究』第44号の発行、日本社会福祉学会第20回セミナー「人口減少社会から考える社会福祉—パラダイムシフトへの道—」や「孤立・孤独支援に求められるソーシャルワーク実践」などの研修の開催などを行いました。取り組み成果はわずかなものであっても、ご紹介した「ライラック」のように北海道の地で根を張り、発展させるものにつなげていきたいと思います。

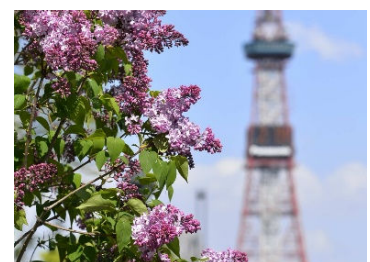
ライラック(Lilac, 学名Syringa vulgaris)

モクセイ科ハシドイの落葉樹。

ライラックの呼称は英語の仮名転写に由来し、他にフランス語由来のリラ (lilas) でも呼ばれ、和名はムラサキハシドイ (紫丁香花)

<特徴>ヨーロッパ原産。春(日本では4-5月)に紫・白色などの花を咲かせ、香りがよく香水の原料ともされています。

<花言葉>友情・青春の思い出・純潔・初恋・大切な友達など。



ドイツの都市で目にした社会福祉と戦争の影 社会福祉アーカイブズの必要性

西田 恵子
立教大学

ドイツのある町の公文書館で保存されている社会福祉施設の文書を閲覧していたとき、思わず息をのんで動揺したことがある。

私は地域福祉が専門領域で、地域における民間福祉団体の運営の困難と課題について関心が高い。そのことに関して近年は、第二次世界大戦後に要援護者と福祉施設に対して救援活動を展開したアメリカのLARAという海外救援組織とその活動を研究している。焦点は日本なのだが、研究の展開には国際比較が有効だと考え、日本と同様に支援を受けていたドイツと韓国を並行して調べることにした。幸いなことに研究チームをつくるにあたっては社会福祉学を中心としながら政治学、法学、アーカイブズ学の研究者に参加していただくことができた。研究を企画した者としては望んだ研究体制を敷くことができたといえる。

さて、ドイツである。ドイツ固有の州制を考えれば体系的な調査は容易なものではない。当初から日本の横浜港に準じた港を抱えるブレーメンを主要な調査地域に位置づけてはいたが、なかなか成果があがらないことや調査を一つの都市のみで終わらせる危険性をとらえ、調査対象の範囲を広げて複数の都市で調査を進めることにした。新型コロナウイルスが感染拡大する前のミュンヘン、ハンブルクの公文書館、ウイルスが感染縮小の気配に転じた2023年3月のハノーファー、ツェレ、オスナブリュックの公文書館、そして研究休暇中の2024年2月のベルリンの公文書館などである。一連の調査で常に不思議だったのは、日本では当時の国語の教科書に載るなどして広く知られたLARAの救援活動が、物量も期間も圧倒的に上回っていたドイツでありながら、それを知っている人物は皆無に等しかったことである。現在のドイツ現代史の指導者的存在である教授もソーシャルワークの教授も福祉施設関係者も、そして数は少ないが高齢者施設の利用者も皆、知らないと言う。実は戦後混乱期や大規模災害時に救援活動を行う組織は複数ある。たとえば私たちの研究対象は厚生省（当時）が管轄していたものだが、その他に通産省が管轄していたCAREなど諸々があった。ドイツで知られているのはCAREで、これは誰もが知っており、高齢者施設の利用者は「子どもの頃に学校で習った」と口々に発言するほどであった。このことについてはここでは踏み込まないが、社会福祉の研究者にとっては興味深いミステリーである。

しかし、一人だけ私たちの研究に関心を持った人物がいた。名和田是彦教授（法政大学）の調査と人脈により2017年にお目にかかることができたカール＝ルードウィヒ・ゾンマー氏である。氏との対面は一度きりで、歴史学者であった氏は東西分断という背景を基盤として政治に主眼をおいた研

究を進めておられ、私たちの関心にある要援護者支援や社会福祉施設の運営という観点からの資料収集はしておられず、残念ながら意見交換で知見を深めるまでには至れなかった。氏の関心はすでに別のものに移っていたことにもよる。氏が収集した資料の多くは知己の牧師や救援組織を研究していた人物から提供を受けたものとのことで、私たちの調査でさらに掘り起こすべき資料の所在は明らかにならなかった。それでもドイツで唯一関心を寄せてくれた氏との出会いは以降の私たちの研究にいくつかの示唆を与えるありがたいものであった。しかしそれとは別に、面談から7年を経た昨冬、私たちはベルリンへ行くせっかくの機会だからと念のため問い合わせたドイツ赤十字アーカイブセンターで想定外に閲覧できるファイルがあることがわかり、大いに喜んだ。「調べたが何も出てこなかった」と氏から聞いていたことが覆ったのである。資料や情報はできるだけ早く入手するのが得策というだけでなく、粘り強く関心を持ち続けたからこそ入手できることもあるという貴重な経験の一つになった。つまり私たちは見つからないことであきらめず、非効率的であっても探し続ける研究の旅に出ることで可能性を手に入れることができるといえる。

書くことに迷いが無いわけではないが、次のことも記しておこう。ある公文書館で幸いにも戦中戦後に運営していた援護施設の文書が複数あり、閲覧することができた。事務的な文書の中には入居者の記録のようなものもあったし、銀行からの再三に渡る出納の証紙もあった。古びた紙片を一枚一枚めくっていくうちに、ドイツ語の苦手な私でもすぐわかる言葉に気がついた。タイプ書きの文書の終わりに、サインをする部分に「Heil Hitler!」とあったのだ。それは1937年の綴りであった。サインされるどの文書にもこの言葉が入っているという事実に私は困惑した。その言葉に直接接して驚いたとともに、その言葉が福祉施設の文書にあったこと、そしてその文書が保存され閲覧できるようになっていたことに驚いた。ヒトラーの影響は福祉施設にまで及んでいたのである。そのことがこの文書が残されていることによって具体的に把握できた。私は社会福祉と戦争は対極にあると考えてきた。だがそれはそれほどシンプルな話ではない。戦争の時代に福祉施設がどのように運営されていたのか、あるいは生き延びる策をとってきたのか、世界で戦争が広がる今日の時勢を思うにつけ、しっかりと把握し直し、検討する必要がある。そのような考察の手がかりになる貴重な資料がアーカイブズの奥底に所蔵されていたのである。日々、紡ぎ出される様々な文書や資料を保存するアーカイブズの重要性、その存在価値をあらためて認識することになった。

ひるがえって日本である。わが国にも各地に公文書館はある。しかしながらその地の社会福祉をたどれる文書や資料を保存しているところは稀有である。それらの意義を認識した稀少な社会福祉法人が保管庫等で蓄積し一部を展示するという状況にとどまるのではないだろうか。私の研究もこの障壁にぶつかっている。戦争被害の大きかった大都市を中心に公文書館や組織規模の大きい社会福祉法人をたずね歩いてきたが、その成果は時間と労力に対して決して大きいとはいえない。問題は戦後混乱期という時代状況と文書等の保存を重視してこなかった習慣、あえていえば文化にある。もちろん中には非常に手応えを得た調査先があったことは強調しておきたい。また、韓国においては日本を上回る困難があった。第二次世界大戦後の政治の混乱状況、韓国戦争が第一の要因にあげられることはいうまでもない。

筆者は社会福祉のあるべき姿を求めていく上で、過去を知ることは重要だと考えている。そのためには「社会福祉のアーカイブズセンター」の整備が必要不可欠だと考える。1980年代後半、筆者が勤務した神奈川県社会福祉協議会には資料室があり、相当の資料や文献が保存されていた。一般の図書館や文書館には保存されていないものが多く、司書が一人、専任職員として採用され、配置されていた。長くこの職に就きベテランとなっていたその司書はまぎれもなく社会福祉のアーキビストの

役割を果たしていた。私をはじめ職員たちは立案のためにこの資料室をしばしば利用した。外部の実践者や研究者も来ていたし、卒業論文を書こうとする大学生、あるいは研究に取り組む大学院生も相談に来ていた。当事者グループのメンバーが自分達の実施した調査の報告書や広報紙を届けにくることは日常的にあった。時には阿部志郎先生（横須賀基督教社会館）がおいでになり、アーキビストとやりとりしながら資料を求めておられる姿も拝見した。その資料室が行財政改革の流れで閉鎖されてからずいぶん時間が過ぎた。残念というほかない歴史の流れである。

願わくは、情報の時代の時代にふさわしい社会福祉の基盤として、都道府県単位で社会福祉のアーカイブズセンターが設置され、ネットワークを結んで成果を育ててほしい。歴史を尋ねる研究者の切なる願いである。



ベルリン州立文書館（2024年2月）筆者撮影



ドイツ赤十字アーカイブズセンター（2024年2月）筆者撮影

【プレ企画】Gather を活用した CS-NET サロン開催報告

張 思銘(北海道大学)



2024年3月30日(土)の14時から15時までの1時間、オンラインにてGatherを活用したCS-NETサロンというプレ企画が開催されました。「メタバースで意見交流しませんか?」をテーマに、第1部では参加者が実際にGatherを活用しながら交流し、第2部では意見交換を行いました。本企画では12名の初期キャリア研究者が参加され、Gatherの初体験、今後CS-NETへの導入の可能性などについて、活気に満ちた雰囲気での交流が行われました。

はじめに、日本社会福祉学会研究支援委員会CS-NETサロン企画を担当している保田真希委員(北翔大学准教授)より、本プレ企画の趣旨とGatherの使い方について説明して頂きました。これまでのサロンで初期キャリアのみなさまは、ハイブリッドやZoomで意見交換した後、交流を継続することが難しいという課題がありました。そこで、サロン後の意見交換の場として、Gatherを導入できるかどうかを検証するため、今回のプレ企画が研究委員によって企画されました。

第1部では、参加者がGatherを利用しながら試験的に交流をしました。Gatherは、オンラインで集まり、交流できるバーチャル空間サービスです。GoogleアカウントまたはEmailアドレスでサインインし、アバターを作成して自由に動き回ることができます。他のユーザーと音声、チャット、ビデオで会話できます。本企画では、保田真希委員が事前に噴水広場と椅子ゲーム室を備えたチャットルームを作成しました。1つのルームに無料で参加できる人数は10名なので、12名の参加者は適宜に出入りしながら交流しました。

最初はテーブル席に座り、アバターの操作方法、ビデオ画面の背景設定、Gatherの初体験談などを共有しました。その後は、アバターを自由に移動しながら、通りかかった人とも気軽に会話していました。

第2部では、参加者はZoom会議に戻り、保田真希会員の司会進行のもと、Gatherの利用経験について意見交換が行われました。参加者数が限られていたため、全員が自由に発言する機会が与えられました。全体的に、Gatherは簡単に使えて楽しいという感想が多数でした。Zoom会議とは異なり、Gatherはゲームのようにアバターを使って、自由に移動しながら交流できる点が好評でした。また、アバターを使うことで親しみやすさが増し、サロンで交流した後にいつでも連絡を取り合える場所として使いやすいという意見もありました。更に、Zoomでブレイクアウトルームに分かれるより、Gatherの方が通りすがりの人とも気軽に交流でき、よりフリーディスカッションができると感じたようです。その他、仕事とは違う場面で気軽にアクセスしてから、同じルームにはみんなが入っていることで心の支えになり、気分転換ができるという意見もありました。また、Gatherにはホストがいないため、いつでも同じルームに繰り返し入ることができ、仲間と気軽に立ち話ができることが、心の居場所のようになれるという声もありました。今回のプレ企画を通して、今後のサロンへの導入に期待が高まりました。しかし同時に、Gatherを今後のサロンに導入することで、いくつかの課題も浮き彫りになりました。スマートフォンなどではアバターを自由に移動できず、使いにくいといった課題があります。最後に、Gather

には1つのルームに無料で参加できる人数が10人に限定されているため、10人を超える場合の費用負担が課題となります。これらの課題を解決し、より多くの人が快適に利用できる環境を整えることが今後の課題です。

全員による意見交換の後、高良麻子理事（法政大学、研究支援委員会委員長）と姜民護会員（同志社大学）より総括と挨拶をいただき、今後のサロンの企画については、会員の皆様による主体的な参加を促すといった方針で検討することが確認されました。本プレ企画は、参加者数が限られていたにも関わらず、新しいものにチャレンジでき、自由で熱心な議論が活発に行われ、盛会のうちに終了となりました。本プレ企画の開催にあたり、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。



追悼

柏木昭先生、感謝を込めて

相川 章子
聖学院大学

2023年12月30日、いつもくつろがれていたご自宅のソファで眠るように天国に召されました。水色の爽やかなシャツにチノパンに紺ブレ、先生のお決まりのスタイル。おしゃれで紳士的なお姿は亡くなられるまで変わることがありませんでした。

私が柏木先生に初めてお会いしたのは大学卒業後、国立精神・神経センター精神保健研究所研究生として働き始めた折でした。その翌年、淑徳大学大学院修士課程に進み、柏木先生にご指導いただいてから幸運にも30年あまり、先生のもとで、実践者として、教育者として、研究者として、そして人として多くを学ばせていただきました。

柏木先生は旧制中学5年で海軍兵学校に入校され、特攻隊員として我が身を犠牲にすることを厭わない覚悟でおられた3年生（18歳）の1945年8月15日、終戦の詔勅が発せられたのでした。その後、25歳で就職された横須賀基督教社会館で、当時の館長であったエヴェレット・トムソン宣教師と出会ったことをきっかけに、ボストン大学・スクール・オブ・ソーシャルワークに留学されました。アメリカへ向かう時の母親との泣きの涙でお別れをしたこと、船の同室だった青年の通訳をされたこと、アメリカの地におりたったときに荷物をもってあげた婦人に温かいアップルパイに冷たいアイスクリームが添えられたパイアラモードをご馳走になったエピソード、実習やキャンプに参加したことや日夜、友人にノートを貸してもらい勉強したことなど、楽しく聞かせていただきました。¹

アメリカで学ばれたソーシャルワークの実践哲学のなかでも、とりわけ「自己決定」にこだわり続けられました。柏木先生が初めて「クライアントの自己決定」を論じたのは、1958年雑誌「社会事業」です。²今でこそ「自己決定」は、倫理綱領にも掲げられ、ソーシャルワーカーとして疑う余地のない当たり前の原理原則となっていますが、ここに至るまでに社会福祉の領域からも、また精神医学の領域からも多くの批判を受けてこられました。しかしながら決して揺らぐことなく、怯むことなく、確固たる信念として伝え続けられました。

それは、精研デイケアをはじめ、地域におけるトポスとしての「けやき亭」（就労継続支援B型、初代理事長）での精神障害の方とのかかわり、実践に基づかれた理論であったのだらうと思います。

また、自己決定を静態的権利論としてではなく、「かかわり」という力動的な関係性のなかで生み出されるものとして、「かかわり論」を常に展開しておられました。

2020年2月に聖学院大学にて初めて柏木先生と対談講演をさせていただきました。そのときの講演内容等を書籍化することとなり、その打ち合わせで、編集担当者と先生のご自宅におうかがいした

¹ 柏木昭：特別講義：私とソーシャルワーク・福祉の役わり・福祉のこころ みんなで参加し共につくる，聖学院大学出版会，60-95，2011。

² 柏木昭：ケースワーク指標としての自己決定原理。雑誌「社会事業」，14(1)；9-16，1958。

のが亡くなられる3週間ほど前でした。このときも、ゲラを前に私たちにクライアントとの協働、「かかわり」と「自己決定」を力強く説いてくださいました。

そのときお渡ししたゲラに赤の入った校正原稿が亡くなられた後、ご自宅にちゃんと置かれていました。まさに生涯現役として、多くのことをその生き様から教えていただきました。

今年5月に召天された奥様と天国で再会され、きっと仲睦まじい会話を楽しまれていらっしゃるのだろうと思います。ご信仰のうちに天国への凱旋をなされたことを思い、そして心からの感謝を込めて筆を置きたいと思います。

2023年度第5回理事会報告

開催日時:2024年3月3日(日) 10:00~12:40

開催場所:一般社団法人日本社会福祉学会事務局(Zoomによるオンライン開催)

I. 会長挨拶

定刻となり、空閑浩人会長より挨拶があった。

II. 理事会開会宣言(欠席理事の確認)

出席者全員がオンライン参加によるWEB会議の開催に際して、音声に問題なく、出席者が一堂に会するのと同等の意思表示が互いにできる状態にあり、議事進行に支障がないことを確認した。

定款第42条に基づいて空閑会長が議長となり、出席理事および欠席理事を確認した。定款第43条に規定されている要件を充足したため、「2023年度第5回理事会」を開催するとの宣言があった。なお、定款第47条に則り、議事録署名人として空閑会長、大島監事、岡部監事を選出した。

III. 審議事項

第1号議案 入会審査

総務担当木下理事より、配付資料に基づき説明があった。審議の結果、30名全員の入会が満場一致で承認された。

第2号議案 2024年度事業計画案および予算案について

各委員会および地域ブロックから提出された2024年度の事業計画案について、今年度からの変更点を中心に各担当理事より配付資料に基づき説明があった。

2024年度事業計画案を基に作成した2024年度予算案についても、今年度からの変更点を重点的に精査しながら、法人全体の予算額が妥当であるか等の検討をした。

審議の結果、2024年度事業計画案および予算案が満場一致で承認された。

第3号議案 「一般社団法人日本社会福祉学会 基本構想委員会規程」制定について

総務担当木下理事より、学会のあり方検討会を引き継いで2024年度より立ち上げる学会基本構想委員会の規程案について説明があり、審議の結果、満場一致で承認された。

第4号議案 「一般社団法人日本社会福祉学会 委員会規程」の改正について

総務担当木下理事より、2024年度より学会基本構想委員会を常設委員会とするため、「一般社団法人日本社会福祉学会 委員会規程」に追加する必要があるとの説明があり、審議した結果、満場一致で承認された。

第5号議案 2024年度定時社員総会での名誉会員の推挙について

総務担当木下理事より配付資料に基づいて、「一般社団法人日本社会福祉学会名誉会員規程」第2条第1項に該当する白澤政和会員、黒木保博会員および牧里毎治会員の3名を名誉会員へ推挙する旨の提議があった。

審議の結果、3名の功績を讃えて名誉会員へ推挙することが満場一致で承認された。

第6号議案 2024年度定時社員総会の議題について

総務担当木下理事より、2024年度定時社員総会の議案書(案)について、配付資料に基づき説明があった。今回の定時社員総会では、例年通りの議題に加えて、次期役員の承認、名誉会員規程の改正、名誉会員への推挙および学会基本構想委員会の発足に関する議案があることを確認した。

審議の結果、2024年度定時社員総会の議題が満場一致で承認された。

第7号議案 全国大会運営委員の委嘱および解嘱について

研究担当伊藤理事より配付資料に基づき説明があり、2024年3月31日付けて、武蔵野大学の委員3名よりその任を解き、2024年4月1日付けて日本福祉大学の委員3名を4号委員から3号委員とすることが満場一致で承認された。また、新たに同志社大学の4名を5号委員に委嘱し、2024年4月1日付けて4号委員とすることが満場一致で承認された。

第8号議案 秋季大会当日投影資料および当日配付資料の事前確認の廃止について

研究担当伊藤理事より、第72回秋季大会では当日発表スライド、ポスター原稿、当日配布資料の事前確認は行わないことが提議され、審議の結果、満場一致で承認された。

第9号議案 地域ブロック内組織の委員への依頼状について

地域ブロック内の委員を務めた会員に対して依頼状(または委嘱状)を発行するか否かについて審議した結果、「一般社団法人日本社会福祉学会委員会規程」第一条に掲載されている常設委員会の委員への委嘱状は本部事務局より発行することとし、地域ブロック内の委員会の委員への委嘱状(または依頼状)の発行に関しては各地域ブロックの裁量に委ねることが満場一致で承認された。

第10号議案 その他(フォーラムの継続可否、特定資産について等)

総務担当木下理事より、2025年度以降のフォーラムの継続および特定資産の継続等について、現体制の任期中にある程度の方針を定めておく必要があるとの説明があった。継続審議とする。

IV. 報告事項

1. 2023年度会員動向

総務担当木下理事より、2023年度の会員動向について報告があった。

2. 2023年度事業報告書および決算書の提出について

総務担当木下理事より、2023年度事業報告書および決算書の提出依頼があった。

3. 第9期役員候補者選挙管理委員会からの報告

第9期役員候補者選挙管理委員会担当の木下理事より、今回の投票率は76.9%で、当選者16名が確定したとの報告があった。

4. 全国大会運営委員会からの報告

研究担当伊藤理事より、各行事の準備状況等について配付資料に基づき報告があり、その後、行事ごとにそれぞれの担当理事から詳細な説明があった。

5. 機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集担当坪理事より、機関誌『社会福祉学』の論文投稿受付・審査および編集状況について、配付資料に基づき報告があった。

6. 国際学術交流促進委員会からの報告

国際学術交流促進委員会担当の金子副会長より、第72回秋季大会で開催するシンポジウムの企画について、配付資料に基づき報告があった。

7. 学会賞審査委員会からの報告

学会賞審査委員会担当杉山理事より、2023年に公刊された研究業績を対象に学会賞推薦図書および論文を募集した結果、学術賞に7点、奨励賞（単著部門）に4点、奨励賞（論文部門）に1点の推薦があったとの報告があった。

8. 研究倫理委員会からの報告

研究倫理委員会担当村山理事より、現在進行中の調査案件はないとの報告があった。

9. 広報委員会からの報告

広報委員会担当岩永理事にかわり木下事務局長より、3月4日に「広報委員会だより」通算68号をメール配信し、最近の学会動向について会員への周知を行ったとの報告があった。

10. アーカイブ化推進委員会からの報告

アーカイブ化推進委員会担当元村理事より、学会史資料調査の第3弾を実施したとの報告があった。

11. 研究支援委員会からの報告

研究支援委員会担当高良理事より、2024年2月11日（日）に関西地域ブロック第55回若手研究者・院生情報交換会との共催で第4回CS-NETサロンを開催したとの報告があった。

12. 学会のあり方検討会(基本構想委員会)からの報告

総務担当木下理事より、12月28日(木)に委員会を開催し、継続課題について検討したとの報告があった。

14. 地域ブロックからの報告

- ・北海道地域ブロック:2024年3月9日(土)に研究大会・シンポジウムを開催する。『北海道社会福祉研究』第44号を年度末にWEB発行する予定である。
- ・東北地域ブロック:記念号となる機関誌20号の発刊作業を進めている。第23回大会を7月28日(日)に東北文教大学にて開催予定である。
- ・関東地域ブロック:3月17日(日)に2023年度研究大会の開催を予定している。
- ・中部地域ブロック:5月19日に春の研究例会として、自由研究発表、大学院生・若手研究者のための勉強会、総会およびシンポジウムの開催を予定している。また、『中部社会福祉学研究』第15号を3月末に発刊予定である。
- ・関西地域ブロック:2023年度年次大会および総会を3月2日(土)に桃山学院大学にて開催した。また、研究支援委員会との共催で2月11日(日)に第55回若手研究者・院生情報交換会を開催した。第56回若手研究者・院生情報交換会は3月17日(土)に大阪公立大学杉本キャンパスにて開催予定である。
- ・中国四国地域ブロック:前回理事会以降、報告事項は特になし。
- ・九州地域ブロック:『九州社会福祉学』第20号(記念号)、2024年度事業計画案および予算案等について検討している。2024年秋に郵便料金の大幅な値上げが予定されており、予算を圧迫することが予想されるため、ブロック運営において深刻な問題となっている。いかに郵送料金を維持または減少できるか、本部および各地域ブロックと情報共有できるよう要望があった。

15. その他(後援依頼、関連団体からの報告、他)

・後援(協賛)依頼について

前回理事会での報告以降、後援依頼への対応なし。

・関連団体からの報告

1) 日本社会福祉系学会連合

保正副会長より、研究支援委員会による初期キャリアにある研究者のニーズ調査報告書を踏まえて、日本社会福祉系学会連合で2月1日~29日まで調査を実施したとの報告があった。回答の集計・分析結果は後日報告する予定である。

2) ソーシャルケアサービス研究協議会

報告事項は特になし。

3) 社会政策関連学会協議会

杉山理事より、3月9日(土)に東洋大学白山キャンパスおよびオンライン配信にてシンポジウム「学術の役割を考えるー学問と社会の関係を問い直すための知恵ー」の開催を予定しているとの報告があった。

4) 社会学系コンソーシアム

木下理事より、3月9日(土)に「なぜ、社会的孤立は問題なのか？」をテーマに公開シンポジウムのオンライン開催を予定しているとの報告があった。

5) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会:GEAHSS(ギース)

高良理事より、第7回GEAHSS公開シンポジウム「なぜ日本のジェンダー指数は低いのかー経済、法律、教育、政治の各分野から考える」+「若手」・女性のためのテーマ別ディスカッションが開催されたとの報告があった。

6) 人文社会系学協会連合連絡会

報告事項は特になし。

7) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟

空閑会長より、国家試験、令和6年能登半島地震への対応等を行っているとの報告があった。

議長は、議事終了を告げ、12時40分に理事会を解散した。

以上

日本社会福祉学会事務局から

◆会費の納入はお早めをお願いします

平素より学会活動にご理解、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

4月上旬に2024年度の年会費振込用紙を送付いたしました。皆さまのお手元に届きましたでしょうか。皆様からお納めいただきました年会費は、学会活動を支える貴重な財源となりますので、未納の方は至急お納めくださいますようお願いいたします。

また、2022年度の年会費が未納の方は、『社会福祉学』の送付を一時停止させていただきます。会費納入を確認しましたら学会誌の発送を再開いたしますので、ご了承くださいますようお願いいたします。

これから納入される方で、銀行振込みによるご入金をお考えの方は、お名前の前に会員番号を入力してください。また、大学等のご所属先を通じてお振込みをされる場合は、学会事務局宛に①会員名、②会員番号、③振込日、④振込金額、⑤振込名義、⑥備考をメールまたはFAXでご連絡ください。

◆登録情報更新のお願い

お引越しや所属先の異動等により登録情報に変更のあった方は、学会ホームページの会員ページ「マイページ」より、以下の手続きが可能ですので、どうぞご活用ください。

①登録内容の確認・変更、②パスワードの変更、③会費納入状況の確認、④会員名簿検索

◆メールアドレス登録のお願い

本学会では会員の皆様への連絡手段としてメール配信を利用しています。メールアドレスの登録をされていない方は、メールアドレスの登録にご協力くださいますようお願いいたします。現在、メールアドレスを登録されていない方で、メールアドレスの登録にご協力いただける方は、学会事務局<office@jssw.jp>までご連絡ください。

また、会員ページ「マイページ」にログインされる際のパスワードをお忘れの場合、会員番号と登録されたメールアドレスによりWEB上でパスワードの再設定が可能です。ぜひ一度ご確認ください。

編集後記

学会ニュース第96号をお届けいたします。第9期の新体制がスタートしています。新たな役員、各種委員会構成については学会ホームページからご確認ください。今号は、和気純子新会長の就任の御挨拶をはじめ、第72回秋季大会開催の案内、第72回春季大会の報告、地域ブロックの報告、シリーズ「日常から離れて」、CS-NETサロン開催報告など、さまざまな場所での学会活動の様子をお届けしております。

2024年5月26日(日)に開催された第72回春季大会テーマは、「戦争と社会福祉ー歴史研究から学ぶ」ことです。戦争が生み出した課題(多くの人々の生命・生活・人生を奪うことと、優生思想の正当化、排外主義の高揚、戦争孤児の発生)と、その中で福祉がどのように展開されてきたのかは、現在も議論されています。山田壮志郎会員(日本福祉大学)が述べたとおり「過去の問題としてでなく現在の問題として捉える」ことが重要だと感じました。

今回のシリーズ「日常から離れて」は、西田恵子会員(立教大学)より「ドイツの都市で目にした社会福祉と戦争の影ー社会福祉アーカイブズの必要性」というテーマでご寄稿いただきました。特に、「社会福祉のあるべき姿を求めていく上で、過去を知ることは重要だと考えている」という部分が印象的でした。社会福祉において現状分析も重要であるが、これからのよりよい社会福祉実践を行うためには、これまでの歴史から社会福祉がどのように展開されてきたのか分析することが非常に重要だと思いました。皆様もぜひご一読ください。

任 セア(立教大学)